



ポーランドの道産子

Edyta Rzepka エディータ・ジェブカ

私たちは、大学の勉強を終えてまもなく結婚し、すぐに日本にやって来ました。私たちは若く、これから住むことになるだろう世界と国に対する好奇心でいっぱいでした。始めはここに一年半だけ滞在する予定だったので、子供を作ろうなどという考えが浮かぶこともなく、一年半という時間を、日本のさまざまな場所を訪ね、ひとと知り合い、文化を知ることにより最大限使いたいと考えていました。実際その通りになりました。日本で最初の数ヶ月は、学業はもちろんですが、それ以外には主として遊びに時間を費やしました。

ここに後3年残ることになったとき、自分たちの子供を作るという考えが徐々に生まれ始めました。しばらくの間それは単なる将来の計画に過ぎませんでした。私たちは親の役割を果たせるほど成熟していましたが、まったく別の理由で私の方に精神的な準備が出来ていなかったのです。というのも当時の私の日本語の知識は不十分で、このことでいつも不便な思いをしていたからです。そういうわけで勉強に取り掛かり、いくつかの日本語のコースに登録しました。そして時は流れていきました。

私たちの周りの知り合いの夫婦たちが、子供の誕生という喜びにあふれたニュースをますます頻繁に知らせてくるにつれ、友人たちがもう子供を生む決心をするほど勇気があることに対し、私の中に一種の嫉妬心のようなものが生まれました。というのも私は絶えず怯えていました。もっとも怯えていたのは、おそらく一番近い家族から遠く離れたよその国で、自分たちだけではうまくやっていけないのではないかということです。しかしついに転機となる日がやって来ました。自分を信じる心を与えてくれたのは、私の日本語の先生でした。あるメールで彼女は二番目の子供をアメリカで生んだと知らせてくれました。彼女も自分の母国から遠く離れ、頼れるのは夫だけで、それに加え小さな子供を二人も抱えていたのです。そのとき私の念頭に次のような考えが浮かびました。この世にはきっと私と同じような状況にありながらも自信をもって立ち向かっている女性が何千人もいるに違いないと。どうして私に出来ないことがあるのでしょうか。

私たちが親になると知らされた日は、おそらく長いこと私たちの記憶に残るでしょう。それは大きな喜びでした。この喜びは、子供の将来の計画を立てること、子供の名前を考えること、私たちの小さな部屋に子供用のベッドを入れるために家具の配置を考えることと結びついています。妊娠したということを確認する前に、この嬉しい知らせをポーランドの両親ともう分かち合っていました。

すぐに病院に行かねばなりませんでしたが、一番近い産婦人科がどこにあるかインターネットで調べ、翌日に出かけました。中に入ると、待合室がうす暗いのにぞっとし、患者が全く誰もいないのに驚かされました。それに加えて、私たちが腰掛けたソファから、眺めた雑誌にいたるまで、ここにあるものすべてが古ぼけていました。お医者さんまでが年寄りで、あまり親切なひとではありませんでした。検診が終わって私たちが医者から耳にしたのは、「おめでとうございます」というお決まりの表現ではなく、「産みたいんですか」という質問でした。「一体何を聞くの!」と私は思いました。「こんなに長年にわたる経験豊かな医者が、自分の患者の顔からこの喜びの表情を読み取れないなんて一体どういうこと!」。私たちがあらかじめカルテに書いておいた質問に対しても面倒くさそうに、短く答えたただけでした。自分が妊娠したということ以外何も知ることが出来ませんでした。それどころかこのクリニックを出ながら、以前にもまして疑いと恐怖の念を感じ震えながら確信したのです。「日本でなんて産みたくないわ!」

「日本でなんか産みたくないわ!」「イヤよ!」初めて病院を訪れた後、私はこういう風にしか考えられませんでした。主人はいつものように私を慰めてくれます。「大丈夫だよ。知り合いに聞いたり、インターネットで調べたりして、いいお医者さんや居心地のいいクリニックを見つけようよ。」

しばらくしてようやく日本にはふたつのタイプのクリニックがあると知りました。つまり産婦人科と婦人科です。それまでそんなことは知りませんでした。最初に私たちが探し出したのは「間違った住所」、つまり婦人科のクリニックだったのです。だから多分お

医者さんは少し不親切だったのでしょう。もうこれ以上ここに来ないようにそうやって私たちに分からせようとしたのかもしれませんが。でもどうして直接そう言ってくれなかったのでしょうか？ 分かりませんが単にそんな性格の人だったのかもしれませんが。いずれにせよ妊娠した女性でこんなクリニック、こんなお医者さんのところに行きたがるひとなんていないに違いありません。私も行きたくありませんでした。

だから一ヵ月後の次の検診までには知り合いに落ち着いて聞いたり、インターネットでいろいろなクリニックを探したりして自分たちの考えで一番いいところを選ぶ時間がありました。今回の「探索」では、札幌在住の女性がいろいろな病院での自分の体験を書いているインターネットのディスカッション・フォーラムを見つけました。簡単に言えば、そこでは病院や具体的なお医者さんを他の女性に勧めたり思いとどまらせたりしているのです。そのフォーラムを読み、日本で女性は麻酔を受けて出産することは稀で、出産の時、麻酔をしてもらえる病院は札幌には多くないと初めて知りました。

私にはこのことは非常にショックでした。というのもヨーロッパやアメリカでは出産時の麻酔は非常に一般的で、およそ半分の妊婦が麻酔を利用しているからです。ポーランドでも同様に、出産時には麻酔を「希望」しそれを(有償で)受けることが出来ます。私は以前に一度も出産をしたことがなくそれがどんな痛みかも分からなかったので、麻酔を受けることが出来るところを選びたいと思いました。ディスカッション・フォーラムのリストの中で他の女性に評判がよく、家の近所にあり、麻酔を受けられるとなると、残ったクリニックはたったひとつでした！ やがてそこに出かけました。他に選択の余地がないという心理

的な思い込みがそうさせたのかもしれませんが、その病院はすぐに気に入りました。

入り口をくぐるとすぐに自分が病院ではなくてまるでホテルにいるのではという印象を受けました。清潔で、広々としていて、明るい色にあふれ、静かで、スピーカーからは落ち着いた音楽が流れ、接待も気持ちよく、このクリニックのことを良く言う患者さんもたくさんいました。お医者さんも若くて愛想が良く、外国人の訪問に驚いた様子もありませんでした。この病院ではよく外国人が出産しているようにも見えました。

次の患者さんが列をなして待っているというのに、私の質問に辛抱強く答えてくれました。後で私は助産婦さんと話をする事になり、私にいくつか質問をして、私の疑問にさらに答えてくれるとも教えてくれました。助産婦さんの説明のなかでひとつだけが、私にはショックでした。彼女は私の体重を量ったあと、何か自分のノートのようなものを見て、私はこの妊娠中に9キロ、最高でも10キロしか太つてはならないということでした。最初は笑顔でこのことを受け止めました。でも後になってこれが日本ではいかに大事なことなのか、どれほどきちんと管理しているかがわかりました。おそらく多くの女性が妊娠中に体重が増えすぎて、あとでその余分な目方を減らすのが大変だからでしょう。

それ以外にも助産婦さんは話の間に私の頭に浮かんだ質問に答えてくれました。この会話のことをとてもよく覚えています。彼女はあまりにも親切だったので、こんなクリニックと彼女のようなひとの看護のもとでなら私はすぐにでも産みたいと、もうその場で彼女に言ったほどでした。(佐光伸一 訳)

